

Title	モーリス・メルロ=ポンティにおけるフロイト主義
Sub Title	Freudisme chez M. Merleau-Ponty
Author	河野, 哲也(Kono, Tetsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1989
Jtitle	哲學 No.88 (1989. 6) ,p.29- 49
JaLC DOI	
Abstract	<p>以上われわれは,メルロ=ポンティにおけるフロイトと精神分析の解釈を,年代順に考察・ 解釈してきた。彼は,既に初期の著作からフロイトの洞察に関心を示し,最晩年に至るまで,その興味は持続し,重要性をましていった。彼が,それらの著作と論文で,一貫して問題としていたのは,われわれが「性の広がり」と呼んだもの,すなわち,性的対象及びそれらと結び付く身体器官が多種多様であることであった。特に,「知覚的同一性」,「シンボリズム(象徴性)」,「多元決定」といったフロイトの概念に代表される考えは,絶えず彼の議論の中心に位置していた。フロイトが,それらの概念において共通して示していた事実は,性欲や性的活動において,その対象は様々な形で移行し,交換し合い,また同時に指向されることである。さらに重要なことは,これら性的諸対象の間の結び付きは恣意的・ 偶然的なものではなく,むしろ,性的活動において指向されているのは,それら諸対象の結び付きを裏打ちしている「系列」自体であり,「次元」や「極」自体である事なのである。フロイトの提示したこの事実を,いかに自分の哲学に組み込むかにおいて,彼の前期と後期の立場は異なったものとなる。前期において彼は,この性的指向や対象のあり方の特徴を,客観的知覚とは異なるものであると主張しながらも,それを高次の構造や人間存在に統合し,両義的な知覚意識と捉えることで説明しようとしていた。しかし,後期の思想では,この性的活動が,意識の次元とは異なった,独自の意味層を形成していることを主張し,さらに,それが知覚意識のモデルであり,知覚を組織する骨組みであるとする見解に到達するのである。このメルロ=ポンティの到達点から引き出せる結論は以下のようである。1.知覚において原初的に指向されるのは,個物・ 個体ではなく,ある系列であり,領野であること。むしろ個物は知覚において後発的であり,この系列や領野の知覚,すなわち「象徴的母胎」の知覚こそが,諸対象の交換性・ 等価性を可能にしているのである。この立場を取るならば,個物の知覚から出発して,その後に,諸物間の関係の知覚を神秘的な形で想定しなければならない誤った観点を放棄できるのである。よって,知覚の起源に関して,今後探求されるべき点は,この「象徴的母胎」の機能とメカニズムとなるだろう。2.さらに重要なことは,この経験の分節化・ 構造化(広義ではゲシュタルト化と呼べるであろう)が,情動的・ 運動的なものと不可分であることである。諸物間の交換性や等価性を保証しているのは,単なる認識活動ではなく,性欲であり性活動であった。つまり,知覚野は,根源的には,主体の情動や運動能力に従った形で組織・ 形成されるのである。この意味で,世界は,能動的身体に応答するもの,主体の能動力=「我為し能う(jepeux)」の相関者であると言えるだろう。知覚に関するこの観点は,言うまでもなく,ベルクソンに彼を近づけるものである。</p> <p>Dupuis La structure du comportement jusqu'a son dernier travail, Le visible et l'invisible, Merleau-Ponty demeurait intresse par le Freudisme, dont l'importance augmentait de plus en plus selon le developpement de ses pensees. Pour comprendre sa philosophie, il est donc necessaire d'envisager le changement de ses interpretations du Freudisme et de la psychanalyse. En suivant chaque texte de Merleau-Ponty sur Freudisme, nous pourrons eclaircir son point de vue sur la relation entre la conscience perceptive et l'inconscience et sur le role du mecanisme inconscient dans la formation du champ perceptif. Ce que Merleau-Ponty a toujours remarque dans les decouvertes freudiennes, c' est le polymorphisme et la perversite des objets sexuels et la sexualite elle-meme. Dans la premiere periode, Merleau-Ponty a essaye d'expliquer ce fait par l'integration de la sexualite dans l'ensemble de l'existence humaine ou dans la structure consciente. Mais dans la derniere periode, en critiquant son opinion precedente, il en est arrive a considerer ce mecanisme inconscient comme le modele ou l'ensemble d'armatures organisatrices de la conscience perceptive. A travers ses interpretations, nous pourrons conclure que la perception originaire ne se fonde pas sur l'intention a la chose ou a l'individu, mais sur le mecanisme inconscient (la matrice symbolique), qui permet la transitivity et l'equivalence des choses et qui n'est pas separable du desir et du mouvement.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000088-0029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-0000088-0029</a>

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モーリス・メルロ＝ポンティ  
におけるフロイト主義

河 野 哲 也\*

Freudisme chez M. Merleau-Ponty

*Tetsuya Kono*

Dupuis *La structure du comportement* jusqu'à son dernier travail, *Le visible et l'invisible*, Merleau-Ponty demeurait intréssé par le Freudisme, dont l'importance augmentait de plus en plus selon le développement de ses pensées. Pour comprendre sa philosophie, il est donc nécessaire d'envisager le changement de ses interprétations du Freudisme et de la psychanalyse.

En suivant chaque texte de Merleau-Ponty sur Freudisme, nous pourrions éclaircir son point de vue sur la relation entre la conscience perceptive et l'inconscience et sur le rôle du mécanisme inconscient dans la formation du champ perceptif.

Ce que Merleau-Ponty a toujours remarqué dans les découvertes freudiennes, c'est le polymorphisme et la perversité des objets sexuels et la sexualité elle-même. Dans la première période, Merleau-Ponty a essayé d'expliquer ce fait par l'intégration de la sexualité dans l'ensemble de l'existence humaine ou dans la structure consciente. Mais dans la dernière période, en critiquant son opinion précédente, il en est arrivé à considérer ce mécanisme inconscient comme le modèle ou l'ensemble d'armatures organisatrices de la conscience perceptive.

A travers ses interprétations, nous pourrions conclure que la perception originare ne se fonde pas sur l'intention à la chose ou à l'individu, mais sur le mécanisme inconscient (la matrice symbolique), qui permet la transitivité et l'équivalence des choses et qui n'est pas séparable du désir et du mouvement.

\* 慶應義塾大学大学院文学研究所博士課程 (哲学)

## 1. 序

メルロ＝ポンティの思想は、決定的な転回、全く新たな発想によってではなく、既に扱っていた諸概念の再把握、再解釈によって徐々に展開していく。『行動の構造』や『知覚の現象学』に代表される初期の思想から、『見えるものと見えないもの』に見られる晩年の思想に至るまで、彼が問題とするのは一貫して身体であり、知覚であり、意味や表現なのであり、その同じ課題の絶えざる取り上げ直しが、彼の思想の独自性を形成するのである。よって、彼の思想展開、とりわけ、汲み尽くし難い彼の晩年の思想を理解するためには、同一の課題が、どのような扱いの変化を受けているかを考察することは有益である。その意味で、フロイトに関する彼の一連の言及は注目すべきものであろう。と言うのも、学位論文である『行動の構造』以来、彼は一貫して精神分析学やフロイトの思想に関心を示し続けているのであり、J. P. サルトル<sup>(1)</sup>、A. グリーン<sup>(2)</sup>、J. P. ポンタリス<sup>(3)</sup>、X. ティリエット<sup>(4)</sup>等が指摘するように、晩年にはその興味はより高まり、明らかにフロイト的概念はその重要性を増しているからである。

本論文では、メルロ＝ポンティの諸著作に見られる精神分析学とフロイトに関する言及を分析しながら、彼がいかなる問題点においてフロイディズムに関心をもち、いかなる思想をそこから汲み取ったのかを明確にして行きたい。先に述べたように、彼は『行動の構造』以来、『知覚の現象学』、「人間と逆行性」(『シーニュ』)、「幼児の対人関係」(1951-52年度のソルボンヌ講義)、「受動性の問題—眠り、無意識、記憶」(『講義要項』)、A. エスナール著『フロイトの業績と現代社会に置ける重要性』の為に書かれた序文、「研究ノート」(『見えるものと見えないもの』)と言った著書、論文でフロイトを扱っているが、我々は、その評価の違いから、彼のフロイト主義を大きく前期、後期の二つの段階に分けることができると考える。その転回点は、1954-55年のコレージュ・ド・フランス講義「受動性<sup>(5)</sup>

の問題」に見出せるので、<sup>(6)</sup>この論文を境として、それぞれの時期の彼の思想をまとめて比較、検討を試みることにする。

## 2. 前期におけるフロイトの扱い

この節で、我々は『行動の構造』と『知覚の現象学』を中心に、彼のフロイト解釈を論じてみよう。『シーニュ』所収の「人間と逆行性」を含めて、それらの著作に見られるフロイト解釈の視点には共通性が見られるが、それはこの時期の彼の哲学的立場の反映であることを示せるであろう。

最初の著作である『行動の構造』において、メルロ＝ポンティは「物質・生命・精神」を、三つの異なった実体領域としてでなく、構造の統合度の異なった三つの秩序として、すなわち、それぞれの段階が先行する秩序を統合しながら高次の全体を形成する階層的秩序と考えた。彼はこの構造論的人間論によって、フロイトの精神分析における様々の発見や概念を、彼流に解釈し直そうと努めている。彼によれば、フロイトの言うところの葛藤、即ちコンプレックス、抑圧、対抗、転移、代償、昇華等の心理現象を説明するには、フロイトが持ち出したような因果概念の体系は不必要であり、彼の構造的な用語で捉え返すことができると主張している。<sup>(7)</sup>

精神分析は、精神的障害をある種の心理的発達の疎外の結果として考えていることは言うまでもない。このことから、精神分析では、発達の問題は常に中心的課題となるのであるが、メルロ＝ポンティは、この発達の問題を『行動の構造』の三章で取り上げる。それによれば行動の発達とは、「行動に対して外的なある力が、同様に外的なある対象に固着することとしてではなく、行動の漸進的で非連続な構造化 (Gestaltung, Neugestaltung) として考察されねばならない」<sup>(8)</sup>のであり、幼児期の態度が新たな構造によって乗り越えられ、その各契機が全体と内的に結び付く〈完全に統合された行動〉に到達することこそが正常な発達なのである。

しかし、精神分析の症例が示すように、ある人が、当人の気付かぬうちに無意識的な機制に支配されて行動しているように思われる場合が存在するだろう。新しい状況が無意識的な過去の状況に還元され得るこうしたときにこそ、精神分析家はコンプレックスの存在を認めるのである。このような観点から、フロイトは、夢や精神病的行動に対し、幼児期の記憶や外傷的事件をその原因として求めた。だが、これに対しメルロ＝ポンティは、確かにそれらの過去が患者の現在の態度を理解する鍵だとしても、コンプレックスは我々の心の底にあり時々顔を出すと云った〈物〉ではないと主張する。

コンプレックスなどの無意識の機制とはむしろ、上記の行動の統合の実現が見掛けのものに過ぎず、不完全であり、行動の中に全体から孤立化した系が存在し、さらにその人がその系の変形も受け入れも拒む場合のことである。従って、メルロ＝ポンティにとってコンプレックスとは、過去のある経験に因果的に支配された現在の行動ではなく、「この種の行動の断片化、ステレオタイプ化された態度、ある範疇の刺激に対する獲得された持続的意識構造<sup>(9)</sup>」として、構造的に捉えられるべきものである。夢における退行や病的コンプレックス、抑圧された無意識とは、むしろ行動組織化の原始的レベルへの逆行、高次の統合的行動からより単純な構造への後退とえて解釈されねばならず、「フロイトが記述した心的機能、彼が想像した力の葛藤やエネルギー的メカニズムは、断片的即ち病的な行動を、しかも極めて近似的な仕方<sup>(10)</sup>で表しているに過ぎないのだ。」

つまり、メルロ＝ポンティによれば、フロイトの言うコンプレックスとは、行動の高次の構造化の失敗によって生じる、ある程度自立的な「意識の断片的な生活」なのである。逆に言えば、フロイトの如く病的症例に基づいた知見では、正常な高度に統合された行動は説明できないと言う事になるだろう。

さて、この『行動の構造』に続く『知覚の現象学』では、彼はどのよう

にフロイトを捉えていたろうか。

この著作の「性的存在としての身体」という節において、彼はフロイトの学説を再び取り上げているが、その論点は前著とは微妙に異なっているようである。というのも、『行動の構造』においてメルロ＝ポンティは、フロイトの言う心的葛藤のメカニズム、コンプレックスの機制を批判的に解釈し直すことに重点を置いていたのに対し、『知覚の現象学』では、問題点は性 (sexualité) 又は性的存在としての人間に移動し、又批評の仕方、フロイトの概念装置を批判するよりもむしろ、その研究の成果を積極的に把握し直そうとする態度がうかがわれるからである。『知覚の現象学』でメルロ＝ポンティは、世界の外にいる認識主観としての主体の概念を批判しながら、正に主＝体である世界の中に受肉した主体、すなわち身体を、世界との関わりの中で捉えようとしていた。この関係を掘り起こすために、「濃密な感情的絆」で身体が世界に巻き込まれてしまう特権的瞬間としての性が問題となり、そこで彼はフロイトの学説を引き合いに出すのである。

メルロ＝ポンティは、まず始めに、フロイトの扱った有名な症例を取り上げながら、それに彼なりの解釈を加えてゆく。フロイトの持ち出すシュナイダーという患者は、自発的に性行為を全く求めようとせず、視覚的にも、触覚的にもほとんど性的刺激に反応しなくなり、その反応も極めて局所的である。こうした性の全面的な無気力と衰弱は、後頭部の限定された傷が直接的原因と見なされるのだが、この症例からメルロ＝ポンティは性と言ったものに対し以下の主張をする。すなわち、「もしも性というものが、人間において一つの自立した反射装置であるなら、もし性的対象が解剖学的に規定される快感器官に到達するならば、大脳の傷は結果としてこうした自動運動を解放し、むしろ、勢いづいた性的運動として表れるであろう。」<sup>(11)</sup>つまり、性とは、ある特定の対象にのみ反応する、やはり特殊で個別的な運動ではなく、経験全体のうちに、ある広がりを持っているので

あり、「シュナイダーにおいて変質しているのは、エロティックな知覚や経験の構造そのものである」<sup>(12)</sup>ことが、この症例から理解されるのである。

しかし、性的な対象というものが、冷ややかに観察される類のものでなく、正に我々を情動的状态に置くものであるかぎり、性とは客観的对象の領野にではなく、「自動運動と表象の中間にある生命的<sup>(13)</sup>地帯」に属するものと考えねばならないであろう。性的な知覚について、「われわれは、主観的知覚とは様相を別にする一つの知覚、知的意味作用とは種類を別にする一つ意味作用、純粹に〈何物かについての意識〉でないような一つの指向性であることを看取する。エロティックな知覚とはコギタツムを指向するコギタチオではないのである」<sup>(14)</sup>

我々は、上記の引用を最も重要な発言と考えなくてはならない。意識は「何物かについての意識」であると言われるが、その「何もの (quelque chose)」とは一体何を指すのであろうか。もし、その「何もの」を「個物、個体」と捉えるならば、そのような定式化は性的知覚においては成り立たないことを、メルロ＝ポンティは主張しているのである。なぜなら、正にフロイトが多くの著作で記述したように、ある状況においては、「代理」、「転移」、「投影」、「倒錯」等の機制により、性的対象の変換、移行、又は同時的指向がありうるからであり、それが唯一の個体を指すとは限らないからである。よって、メルロ＝ポンティにとって指向性とは、ある個物を狙う矢印のごときものではないのである。

それでは、メルロ＝ポンティ的指向性とはどのようなものであろうか。彼はこう書いている。「健常者にあっては、身体は単に仕意の対象として知覚されるのではなく、こうした客観的知覚は一つのより隠された知覚によって住まわれている。すなわち、目に見える身体は、正しく個人的な性的図式によって下から支えられており、この図式が発情域を促進し、性的表情を描き出し、あの感情的全体性に統合される男性的身体自身の諸所作を喚起するのである」<sup>(15)</sup>この「図式」こそが、運動や状態を「形態化」=ゲ

シュタルト化し、その中に性的対象は姿を現すのである。このように、メルロ＝ポンティにあって指向性とは、出来上がった個物を狙う能力ではなく、世界をある意味に基づいてゲシュタルト化する能力のことである。と言うよりもむしろ、ゲシュタルト化こそが、世界の意味的分節化に他ならないと言ったほうが正確であろう。

上のような考えから、メルロ＝ポンティは、「性的」と「性器的」を厳格に区別したフロイトの発想を高く評価する。フロイトによれば性欲とは、単に生殖器の働きに関する諸活動と快感のみを指すのではなく、「性的な」ものは「性器的な」ものに還元できない。なぜなら、性的活動は幼児期から観察されるが、この活動は性器とはいえぬ身体の部分（例えば口唇や肛門など）と関係しており、さらにまた、大人の倒錯的活動にも類似の現象が見られるからである。メルロ＝ポンティは、フロイトの洞察したこの性の拡大性に着目する。「フロイト自身にあって、性的なものとは性器的なものではなく、性生活とは性器を本拠とする過程の単なる結果ではない。リビドーは本能、すなわち定められた対象に自然と向かう活動ではなく、様々な環境に付着し、様々な経験によって固定され、それによって行動の構造を獲得してゆく精神物理的主体の一般的能力なのである。」<sup>(16)</sup>つまり、性欲やリビドーと呼ばれるものは、環境の性的構造化の能力としての一つの指向性のことなのである。

ところが、この構造化の能力とは、メルロ＝ポンティにとって、とりわけ「意識」の統合作用の活動なのである。「フロイトの原理上の宣言がどうであるにせよ、精神分析学的研究が事実上到達したことは、人間を下部構造によって説明することではなく、性の中に、以前は意識的な諸関係や諸態度であったものを見出だすことであり、精神分析学の意味とは、心理学を生物学的にすることよりもむしろ、〈純粹に身体的〉と思われてきた機能のうちに弁証法的運動を発見し、性を人間存在のうちに統合するところにあったのである。」<sup>(17)</sup> 前述したように、性が「性器的」関係以上の広がり

見せるのは、高度の行動の統合化、すなわち「意識」の次元の構造化によるものであり、性が人間生活全体のうちに吸収されるからである。その構造化の沈殿（「以前は意識的な諸態度や諸関係」）こそが、各人の性的対象の特殊性を支えているのである。「視覚や聴覚や性や身体は、人格的実存の単なる通過点、道具や表示ではない。人格的実存が、それ自身のうちにそれらの与えられた無名の存在を取り込み、取り集めているのである。<sup>(18)</sup>」

このメルロ＝ポンティの解釈に、『行動の構造』と同一の視点を見出すことは容易であろう。そこに共通する哲学的観点は、高次の階層的構造への「統合」によって知覚や行動の仕組みを理解する態度である。グリーンが指摘するように、『行動の構造』は知覚する人間を科学の枠組みのうちで、外から扱っており、『知覚の現象学』では知覚する主体を知覚経験のうちで、内側から扱っている<sup>(19)</sup>ということが正しいとしても、階層的秩序の高次のレベルを人間的領域とし、そこに人間的価値や自由と言ったものを見て取る点で、これらの著作は同じ立場に立って書かれているのである。確かに彼は、観念論者と異なり、知覚経験の基盤となる感覚や、人間関係の基盤となる性を、まさにそれが、より高次の統合である人格の絶えざる基盤となり、目的のものが出来上がれば捨てられてしまう道具の類ではないことを理解していた。「……われわれは知覚したり、〔対象との〕関係の生活にはいる前に、栄養を取り呼吸しなければならず、人間関係の生活にはいる前に、視覚によって色彩や色に対し、聴覚によって音に対し、性によって他者の身体に対して存在するのでなければならぬことを付言しなければならぬ。<sup>(20)</sup>」

しかしそれでも、これら前期の著書の特徴は、『行動の構造』において、我々が気付かずに従っている無意識の機制を、統合されえない行動の自立的断片と捉え、『知覚の現象学』では「性的なもの」の広がりやを、その同じ統合作用によって説明したように、「高次の構造への統合」、即ち意識の成立する次元を重視する立場にあると言えるのである。

ここでわれわれは、このフロイト解釈、特に『知覚の現象学』の観点に疑問を呈することができるだろう。メルロ＝ポンティは性的対象がある種の広がりを持ち、性とは個物を狙う矢印のようなものではないことを見抜いていた。この問題はフロイトの学説では、「知覚的同一性」の問題として、初期の著作である『夢判断』<sup>(21)</sup>から登場する。フロイトは心的装置の機能を、それぞれ一次過程と二次過程に分けた。一次過程とは、無意識系の特徴であり、心的エネルギー＝性欲は自由に流れでて、「置換え」や「圧縮」等の機制にしたがって欲求充足を目指す。このエネルギーは、現実的秩序に囚われずに、「快樂原則」に従い、ある表象から別の表象へと移って行く。これに対し二次過程は前意識及び意識の特徴であり、心的エネルギーは「現実原則」によって統御され、拘束され、現実の秩序に従うのである。問題の「知覚的同一性」とは、欲求充足に関して様々な表象の間で成立する等価関係である。エネルギーの放出である充足体験は、性欲と対象の表象を結び付けるのであり、その後主体は「欲求充足に結び付いた知覚を繰り返そうとする。」<sup>(22)</sup>つまり、「知覚的同一性」とは、同一の欲求充足をもたらす知覚対象間の等価性、敢えて言えば妥換性であり、言うまでもなく一次過程、即ち無意識の機制の特徴なのである。よって、フロイトの言う「知覚的同一性」は、我々が普通に言うところの「対象の同一性」とは全く別種のものであるどころか（そうした同一性の方は、「思考同一性」とフロイトは呼ぶ）、対象や個物の同一性とは対立することに気を付けなければならない。

さてこの点で、メルロ＝ポンティのフロイト解釈に矛盾が生じてくるのである。メルロ＝ポンティの指摘したように、「知覚的同一性」を求める一次過程の機制は、「何物かについての意識」としての指向性ではない。フロイトによれば、性的対象はそれらを支えている性感帯同様に多種多様であり、性欲はもともと倒錯的で多形的な特徴を持っているのである。よって「知覚的同一性」は、むしろ快樂原則に従う性欲の知覚的達成なので

ある。<sup>(23)</sup> 一方、メルロ＝ポンティは、こうしたその対象と器官に対する性の広がりをも、「性が人間的存在に統合される」ことによって成立するものだと考えていた。しかし、この高次の構造である「人間存在」、言い換えれば人格的存在とは、とりわけ意識の領域に属する秩序ではなかったろうか。とするならば、メルロ＝ポンティの主張は、「知覚的同一性」を、「圧縮」や「置換え」などの無意識の機制によって支配された一次過程に属すると考えたフロイトの学説と全く矛盾してしまわないだろうか。実際、彼は無意識を、『行動の構造』において「両義的意識」とし、<sup>(24)</sup> 「人間と逆行性」では「両義的な知覚」<sup>(25)</sup> と定義したのであり、このことから、無意識や性と言ったものを、客観的で明晰な知覚とは異なるものであることを主張しながらも、広義の意識のうちにそれを含み込もうとしていたことは明らかだろう。このように、前期のメルロ＝ポンティの哲学的主張は、フロイトの心理学的成果を積極的に取り入れつつも、それとのある種の亀裂を含んでいたのである。

### 3. 後期思想におけるフロイディズム

さて、以上のようなメルロ＝ポンティのフロイト解釈は、1954-55年度の木曜の講義であった「受動性の問題」で、大きく変化を遂げる。「いかにして意識は眠るのか」、「いかにして意識は過去によって動かされるのか」ということが、ここでの問題である。すなわち、夢や無意識と言った、意識にとっては受動的な心的機制の問題である。こうした「受動性」が意識にとって可能であるためには、意識は無意味な素材に意味を押し付ける絶対的な能動性を持ったものであるよりも、「既に制度化された存在領野におけるある種の距離、ある種の異文を実現する」<sup>(26)</sup> ものでなければならない。意識とは絶対的に能動的な何物かでは無く、ある出来上がった（制度化された）地盤から距離を置く行為にほかならない。この意味で、睡眠は覚醒した意識と全く隔絶しているのではなく、むしろ、知覚過程の一時的

脱分化、未分化状態への退行、世界との前人称的關係へ後退なのであり、世界は、この際、不在になっているのではなく、遠ざかっているだけであり、覚醒を再び可能にするだけの世界との繋がりには保たれているのである。

よって、彼は夢についても、夢と現実はお互いにからみあっているのであり、それらを空虚と意味に満ちた世界に区別することはできないと主張する。「覚醒状態にある我々と物や特に他者との關係は、原理的に夢想的性格を有している。我々にとって他者とは夢のように、神話のように現前しているのであり、このことからでも現実と夢の断絶を否認するのに十分である。」<sup>(27)</sup> と言うのも、覚醒が未分化から分化へ移行することにあるならば、覚醒はより未分化な世界の個別化や精確化でしかありえず、その基盤の上に成り立っているからである。実際、われわれが物や人を扱うときには、まず、ある一般的あるいは大まかな、言わば未分化な仕方から始め、やっと最後にしかも特別の場合に、それらを固有の名を持った個別のものとして対処する事は日常経験の教えるところである。道行く人それぞれに人格があるなどとは、我々は普通考えないのだ。

この夢の問題は同時に、夢の主体である無意識の問題をも提起している。メルロ＝ポンティによれば、無意識を第二の主体と考えることはやはりおかしい。しかし、サルトルのように、無意識を、ある事態の受け入れの拒絶に還元し、自己欺瞞的態度の一特殊例と考えるのは、無意識という概念が示している重要な心的機制を無視することになる、と彼は主張する。この批判には、抑圧を自己自身もあざむく「形而上学的猫かぶり」<sup>(28)</sup> と呼び、サルトルに似た定義をした、『知覚の現象学』における彼自身の立場の批判も含んでいるだろう。無意識の発見によってフロイトが為した貢献は、むしろ、「〈われわれにとっての世界〉のうちに閉じ込められた、夢やより一般的には我々の生の加工に責任を追っている始源的・根源的なシンボリズム、〈非規約的思惟〉(ポリツィエ) と言う考え」<sup>(29)</sup> にあるのである。

ここでわれわれが気が付かねばならないことは、「受動性の問題」におけるメルロ＝ポンティは、シンボリズム（<sup>(30)</sup>象徴性）という言葉で、やはりここでも、性の対象の広がりをも問題にしている事である。しかし、その性の広がりには、もはや、高次の構造への統合や意識によって説明されはしない、そうではなくて、無意識と呼ばれるもの自体が、そうした性の広がりを可能にする意味層を形成していることが示されているのである。「フロイト主義の本質は、みかけの下に全く別の現実があることを示したことに無く、行動の分析によって、そこに絶えず複数の意味の層を発見出来ること、その層はすべてそれぞれの真理を持っていること、複数の解釈が可能であるということ、それぞれの『行動の』選択が複数の意味を持ち、その内の一つだけが真だとは言えない複合的生の言説上の表現であることを示したことにある。」<sup>(31)</sup>ここで彼は、無意識の形成する独自の意味体系を認めており、それを意識のうちに統合しようとは考えていないことは明らかである。われわれはこの観点に、前期のフロイト解釈からは抜本的に異なった立場を見て取れるだろう。

上記のフロイト解釈の転換は、「エスナルへの序文」において、より鮮明に現れる。かって、フロイトの因果的説明や生物学主義を批判し、無意識や性の問題を両義的意識に還元させようとしたメルロ＝ポンティは、この論文で、フロイトの理論の観念論的逸脱や安易な観念論的定式化が、精神分析の持つ衝撃力を無効化し、教科書的啓蒙に落としてしまう危険性を指摘する。「エネルギー論ないし機械論的比喩は、少なくとも、フロイト主義のもっとも貴重な洞察の一つであるもの、つまり、われわれの考古学である洞察の域を、あらゆる観念化に抗して守るのである。」<sup>(32)</sup>

このようにフロイトの理論を肯定的に評価しながら、彼はこの論文でもやはり、我々が今まで「性の広がり」と呼んできたものを問題としている。「様々な交換—役割の交換、心と体の交換、想像と現実の交換—についてのこうした驚くべき直観、この混交の普遍性、フロイトはこれらを、しば

しば（「多元的決定」とか「コンプレックス」とか「審級」と言った）自らあつらえて作った用語で記述することもあったが、多くの場合は、「投射」とか「痕跡」とか「表象」と言った）当時の医学や心理学の用語でそれをほのめかすことしかなかった。<sup>(33)</sup>

しかし、メルロ＝ポンティによれば、フロイト自身の曖昧さも手伝って、上記の当時の古い用語の使用から、彼の学説への誤解が生じてくるのである。「例えば、人間関係の支脈であり肋材である性が、有機体の一機能、一つの客観的過程である性と混同される」と言った誤解である。この一文は明らかに彼の自己批判であろう。と言うのは、メルロ＝ポンティは、前期の思想では、性を元々は有機体の一機能に過ぎないものとみなしていたと言えるからである。そう考えていたからこそ、性は、人間存在や高次の構造に統合されることによってしか、その広がりや一般性を獲得しえないと主張したのであろう。だが、もはや彼はそうは考えない。性の広がり、意識や人間存在の統合性によってではなく、無意識の機制により生じるのである。例えば、無意識の機制であるエディプス・コンプレックスが子どもに押し付けるのは、「（磁極のような）極であり、ある参照体系であり、次元」<sup>(35)</sup>なのである。この極や系や次元と呼ばれるものこそが、性的対象の交換性・妥換性等の「混交の普遍性」を可能にする基盤なのである。

よって、メルロ＝ポンティはこう言う。「精神分析が、夢や幻想や行為、そして最後には、身体についての自己自身の空想をさえも通して学んできたことは、想像された男根、つまり象徴的・夢想的・詩的男根を見定めることである。人間を説明するのは、道具的・機能的・散文的身体ではない。反対に、その象徴的、あるいは詩的任務を発見するのは、人間の身体<sup>(36)</sup>なのである。」また、精神分析が夢や機知や失策行為の背後に見出だしたのは、相互に無関係なあるいは恣意的な連想の集合ではなく、ある連想の秩序であり、参照の系列である。フロイト主義によって、「人々が理解するに至ったのは、様々な象徴的母胎、自己から自己へ向かう言語、過去に

よって設備された等価系と言ったものが、単純な行為のうちに群化や省略や歪曲を実現する、ということである。<sup>(37)</sup> 性の広がりを保証するものは、様々の事物や人物、あるいはそれらの観念を等価なものに見なす系列を形成している詩的・想像的な「象徴的母胎」なのだ。このように軌道修正したメルロ＝ポンティにとって、精神分析における無意識の探求と彼の立場は、「人間を一つの仕事場として記述し、……意識には支えられない諸関係、つまり、われわれとわれわれの起源との関係、われわれとわれわれのモデルとの関係を発見しよう目的において正に、合意するのである。」<sup>(38)</sup> 無意識は、もはや彼にとって、知覚のモデルであり起源である。

#### 4. 「研究ノート」

「研究ノート」においても、メルロ＝ポンティは、これ迄述べてきた「受動性の問題」や「序文」での観点を踏襲している。しかし、死の直前まで書き留められていたこのノートには、断片的で未整理であるとは言え、これまでの著作には見られない彼独自の概念や、言語についての独自の問題設定が登場してくる。当然、フロイトの解釈も新しい光の下に置かれるのだが、特に、前節で述べた「象徴的母胎」あるいはフロイトの「多元決定」という概念がより前面に押し出されてくる。われわれは、彼の最晩年の思想の全体像に触れることは出来ないが、フロイトに言及した部分の分析は、その理解への多くのヒントを含んでいるだろう。ここでは、フロイトに関する言及の幾つかを取り上げながら、それを解釈することにする。

1959年5月の「物の超越性と幻想の超越性」という断片では、物（＝個物）と想像的なものや象徴的母胎との関係について述べている。それによれば、物の超越性とは、汲み尽しがたい完全性を持つということであり、絶えず局面的＝射影的である視線の下では、そのすべてが顕現する (*étant toute actuelle*) ことはないということである。「しかし、物がこの全面的な現実性 (*cette actualité totale*) を約束するのは、物がそこにあるから

である。」<sup>(39)</sup> 逆に、幻影は観察可能でないとか、空虚とか非存在と言われるが、そのときの可感的なものと幻影の区別は絶対的でない、と彼は言う。それに続けて彼はこう書いている。「実は物は観察可能ではない。すべての観察の中に飛び越え (enjambement) があり、人は物自体には決して到達しないのだ。可感的と人が呼ぶものは、単に射影の無際限さが沈殿するということにすぎないのだ。逆に言えば、想像的なもの、実存的なもの、象徴的母胎の沈殿あるいは結晶化があるということなのだ。」<sup>(40)</sup>

この断片を解釈することは難しいが、ここでメルロ＝ポンティが暗示していることは、物や個物が知覚の最初の所与ではないことであろう。物が成立するためには、諸観察の単なる積み重ねではなく、それらを具象化・具体化しながら一貫したもの、核を持つものにすることが必要であり、それらを単なる諸観察から一段上の次元に「飛び越え」させることが必要なのである。よって物と幻影を区別させているものがあるとすれば、それは観察とイメージと言った現象上の区別ではなく、ある現象の集合が核を持ってそこにある、即ち現象の結晶化がある、ということに他ならない。むしろ、この物となっていない現象の間には、現実的な観察と非現実的な幻影といった類いの区別はありえないのである。とするなら、そう言った「結晶化」や「沈殿化」以前の最初の世界の経験は、物の知覚ではなく、想像的であり、象徴的母胎に従ったものであることになるだろう。

また 1960 年の「過去と世界の光線」という断片では、フロイトの有名な不安神経症の例を問題としている。フロイトの「狼男」と呼ばれる症例では、原光景による強迫から去勢不安に陥る男性を扱っている。<sup>(41)</sup> 症例に関する詳細は、不必要と思われるので、ここでは省略するが、その患者においては、黄色い縞を持った蝶々と、黄色の縞模様の梨が不安を喚起させるものとして結び付き、さらに、それはロシア語で黄色い肌の女中の名を意味するグーシャという女性を想起させたという。しかしここには、蝶々—梨—女中という三つの回想があるのではない、とメルロ＝ポンティは主張

する。この三つはむしろ結合し、三つの本質化作用 (Wesen) は同じ存在の光線に属し、その中心点で結合していると、彼は言うのである。続いて彼はこう主張する。「従って、結合の多元決定がある。……多元決定作用がなければ、つまり関係の関係、予示的な意味を持った、偶然ではありえないような一致がなければ、結合はありえないのだ。暗黙のコギト (cogito tacite) は多元決定、すなわち象徴的母胎だけを思惟する。<sup>(42)</sup>」

この暗黙のコギト、または、無言のコギトとは、「〈思惟すべき〉混沌とした世界を前にしての我思う一般」、つまり知覚経験に置ける前反省的・非定立的なコギトであるのだが、このコギトが「多元決定」=「象徴的母胎」だけを思惟する、<sup>(43)</sup>という主張は、「受動性の問題」や「序文」で、知覚が、諸物や諸人物や諸観念の間に等価系を形成する無意識の意味層に支えられている、とした主張に一致するだろう。

さらに、1960年5月の「身体と肉-エロス-フロイト主義の哲学」では、フロイトの哲学を、身体の哲学ではなく、後期思想の要となる概念である「肉 (chair)」や「交錯的配列 (chiasme)」によって理解しようとしている。

精神分析では、人間の性格を独自の発達論から理解するのであり、それによれば、例えば、肛門期において糞便に固着した人は肛門的性格を有するようになるという。しかし、メルロ＝ポンティによれば、糞便は性格の原因となることは出来ない。そうであるならば、我々は、皆、肛門的性格者になってしまうだろう。「糞便がある性格を引き起こすのは、主体が、そこに存在の次元を見出だすような仕方、それを生きるからに他ならない」からであり、糞便との関係が幼児においては「具体的な存在論」だからである。<sup>(42)</sup> 肛門的性格と言ったところで、それは何も説明していない。むしろ、そういう性格になるためには、糞便という「具体的な存在物」(l'Étant contréte) を「存在 (l'Être)」の現われと取り、「存在」に向かって開かれた「存在物」の中に、リビドーの備給が固定されることが必要なのである。よって、ある個人が何に固着していたかを知り、それと現在の

彼の性格を関連付ける「実存的精神分析」ではなく、より一般的に「存在」がいかなる存在者を通して現れるかを知る「存在論的精神分析」を行うことが肝心なのであり、このことがフロイトの思想が暗に示していたこと<sup>(45)</sup>なのである。

この大文字の頭文字で書かれた「存在」なる概念に、ハイデガーの哲学の影響を見て取ることもできるだろうが、われわれはここでは、あくまでフロイト的にそれを解釈しよう。とするなら、「存在」とは、性欲＝リビドーと相関したエネルギー的観点から捉えるべきものであり、個別的な対象を通してのみ得られる「存在の現われ」とは、快感や充足体験に他ならないだろう。よって、この文脈において、「存在論」とは「快感や充足経験とは何であるか」、「性欲＝リビドーが外界と交流するとはどういうことか」という快感や充足体験を基とした主-客の関係に関する問いであり、「存在論的精神分析」とは、「いかなる対象が、またはいかなる（対象の）系が快感をもたらすのか」、また「その諸対象を結び付ける系とはいかなるものか」という、性欲＝リビドーが外界と交流するメカニズムの探求となるだろう。

メルロ＝ポンティは晩年の思想において、伝統的な存在論とは異なった独自の存在論を構築しようとしていた。そして上で見たように、その思想の形成において、フロイトの哲学は、もっとも大きな影響を彼に及ぼしたのである。そのことは、「多元決定（＝象徴的母胎）」という概念が「円環性、交錯的配列」という後期の思想の枢軸となる概念と等号で結ばれていたり、<sup>(46)</sup>「フロイトの哲学は、身体<sup>(46)</sup>の哲学ではなく、肉の哲学なのである」といった主張からも理解されるだろう。本来なら、これらのフロイトに関する言及を真に理解するためには、晩年のメルロ＝ポンティの思想全体を明確化する必要があるだろう。しかし、以上の断片とその解釈からも、フロイトが、メルロ＝ポンティの後期思想への展開に、決定的な役割を果たしたことは疑いえないと言えよう。

## 5. 要約と結論

以上われわれは、メルロ＝ポンティにおけるフロイトと精神分析の解釈を、年代順に考察・解釈してきた。彼は、既に初期の著作からフロイトの洞察に関心を示し、最晩年に至るまで、その興味は持続し、重要性をまわしていった。彼が、それらの著作と論文で、一貫して問題としていたのは、われわれが「性の広がり」と呼んだもの、すなわち、性的対象及びそれらと結び付く身体器官が多種多様であることであった。特に、「知覚的同一性」、「シンボリズム（象徴性）」、「多元決定」といったフロイトの概念に代表される考えは、絶えず彼の議論の中心に位置していた。フロイトが、それらの概念において共通して示していた事実は、性欲や性的活動において、その対象は様々な形で移行し、交換し合い、また同時に指向されることである。さらに重要なことは、これら性的諸対象の間の結び付きは恣意的・偶然的なものではなく、むしろ、性的活動において指向されているのは、それら諸対象の結び付きを裏打ちしている「系列」自体であり、「次元」や「極」自体である事なのである。

フロイトの提示したこの事実を、いかに自分の哲学に組み込むかにおいて、彼の前期と後期の立場は異なったものとなる。前期において彼は、この性的指向や対象のあり方の特徴を、客観的知覚とは異なるものであると主張しながらも、それを高次の構造や人間存在に統合し、両義的な知覚意識と捉えることで説明しようとしていた。しかし、後期の思想では、この性的活動が、意識の次元とは異なった、独自の意味層を形成していることを主張し、さらに、それが知覚意識のモデルであり、知覚を組織する骨組みであるとする見解に到達するのである。

このメルロ＝ポンティの到達点から引き出せる結論は以下のようである。

1. 知覚において原初的に指向されるのは、個物・個体ではなく、ある系

列であり、領野であること。むしろ個物は知覚において後発的であり、この系列や領野の知覚、すなわち「象徴的母胎」の知覚こそが、諸対象の交換性・等価性を可能にしているのである。この立場を取るならば、個物の知覚から出発して、その後、諸物間の関係の知覚を神秘的な形で想定しなければならない誤った観点を放棄できるのである。よって、知覚の起源に関して、今後探求されるべき点は、この「象徴的母胎」の機能とメカニズムとなるだろう。

2. さらに重要なことは、この経験の分節化・構造化（広義ではゲシュタルト化と呼べるであろう）が、情動的・運動的なものと不可分であることである。諸物間の交換性や等価性を保証しているのは、単なる認識活動ではなく、性欲であり性活動であった。つまり、知覚野は、根源的には、主体の情動や運動能力に従った形で組織・形成されるのである。この意味で、世界は、能動的身体に応答するもの、主体の能動力＝「我為し能う (je peux)」の相関者であると言えるだろう。知覚に関するこの観点は、言うまでもなく、ベルクソンに彼を近づけるものである。<sup>(47)</sup>

#### 注

- (1) Sartre, J. P. «Merleau-Ponty», *Situation 4*, Paris: Gallimard, 1964.
- (2) Green, A. «Itinéraire de Merleau-Ponty», *Critique*, 211 (1964), pp. 1017-46.
- (3) Pontalis, J.-B. «Note sur le problème de l'inconscient chez Merleau-Ponty», *Temps Modernes*, 17 (1961), pp. 287-304.  
«Présence, entre les signes, absence», *l'ARC*, 46 (1971), pp. 56-66.
- (4) Tilliette, X. *Merleau-Ponty ou la mesure de l'homme*, Seghers, 1970.  
木田 元・篠 憲二訳 『メルロ＝ポンティ あるいは人間の尺度』大修館 1973.
- (5) SC *La structure de comportement*, Paris: P. U. F., 1942.  
P *Phénoménologie de la perception*, Paris; Gallimard, 1945.  
HA «L'homme et L'adversité», *Signe*, Paris: Gallimard, 1960.  
PH *Préface à l'ouvrage de A. Hesnard: L'œuvre de Freud et son*

*importance dans le monde moderne*, Paris : Payot, 1960.

RA Les relations avec autrui chez l'enfant, *Bulletin de psychologie*, 18 (1964), pp. 295-336.

Pas «Le problème de la passivité; le sommeil, l'inconscient, la mémoire», *Résumé de cours*, Paris : Gallimard, 1968.

NT «Notes de travail», *Le visible et l'invisible*, Paris : Gallimard, 1964.

正し、RA は本論文では扱っていない。

(6) 出版年としては「序文 (1960)」のほうが「受動性の問題 (1968)」より早い  
が、後者は既に、1954-55 年において講義された内容なので、実質上、後者  
が早いと見なす。

(7) SC, p. 191 f.

(8) Ibid., p. 192.

(9) Ibid., p. 192.

(10) Ibid., p. 193 f.

(11) P, p. 181 f.

(12) Ibid., p. 182.

(13) Ibid., p. 182.

(14) Ibid., p. 183.

(15) Ibid., p. 182.

(16) Ibid., p. 185.

(17) Ibid., p. 184.

(18) Ibid., p. 186.

(19) Green (1964), p. 1026.

(20) P, p. 186.

(21) 高橋義孝訳 『夢判断』 人文書院 1968

(22) Ibid., p. 465.

(23) Cf., Laplanche, J. & Pontalis, J.-B. *Vocabulaire de la psychanalyse*, Paris : P. U. F., 1967, 1976.

(24) SC, p. 192.

(25) HA, p. 291.

(26) Pas, p. 67.

(27) Ibid., p. 69.

(28) P, p. 190.

- (29) Pas, pp. 69-70.
- (30) 精神分析においては、広義の象徴性は代理形式全般を指す。メルロ＝ポンティは、ここではやや曖昧に、この広義の意味に近い定義をしているように思える。
- (31) Pas, p. 71.
- (32) PH, p. 9.
- (33) Ibid., p. 6.
- (34) Ibid., p. 6.
- (35) Ibid., p. 6.
- (36) Ibid., p. 7.
- (37) Ibid., p. 7.
- (38) Ibid., p. 9.
- (39) NT, p. 245.
- (40) Ibid., p. 245.
- (41) 小此木啓吾訳 「ある幼児神経症の病歴より」 『技法・症例集』 人文書院  
1983 参考
- (42) NT, p. 294.
- (43) P, p. 462.
- (44) NT, p. 323.
- (45) Ibid., p. 323.
- (46) Ibid., p. 324.
- (47) Cf. «Bergson se faisant» *Signe*